

フィンランド語

坂田 晴奈

0. フィンランド語の概要

本稿では、フィンランド語の情報構造と名詞述語文相当の表現に関して、コンサルタントから得た例文を分析する。その前段階として、本節ではフィンランド語について概要を示す。概要は、Hakulinen 他(2004)と松村(1992)を基にまとめる。なお、本稿で扱うフィンランド語は、首都ヘルシンキを中心に話されている共通語である。

0.1. 系統と類型

フィンランド語はウラル語族、フィン・ウゴル語派、バルト・フィン諸語に属する膠着語である。基本語順は SVO で、修飾部先行型である。前置詞・後置詞ともに使用されるが、後置詞の方が数が多い。

0.2. 表記

本稿での表記は、全て正書法に基づく。フィンランド語の正書法は IPA の表記とほぼ同じであるが、a は [ɑ], ä は [æ], ö は [ø], nk は [ŋ] の発音である。

0.3. 音声・音韻

フィンランド語の母音音素は、a, e, i, o, u, y, ä, ö の 8 つである。母音調和があり、前母音の ä, ö, y と後母音の a, o, u は同一形態素内に共起しえない。残りの中立母音と言われる i, e はどちらの母音とも共起できる。全ての母音に長短の区別がある。

子音は、p, (b), t, d, k, (g), m, n, ŋ, (f), s, (š), h, l, r, v, j である。()内の音声は外来語のみに見られる音素である。ŋ は短音の場合、後続する k と共に nk と表記され、長音の場合は後続する g と共に ng と表記される。p, (b), t, k, (g), m, n, ŋ, s, l, r には、長短の区別がある。

0.4. 形態

0.4.1. 名詞

名詞の格は 15 種類である。以下に名詞の格変化の例をあげる。

表1 一般名詞の格変化 (talo「家」を例として)

格の名称	単数形	複数形	意味
主格 (nominative)	talo	talo-t	「家(が)」
属格 (genitive)	talo-n	talo-j-en	「家の」
分格 (partitive)	talo-a	talo-j-a	「家(を)」
対格 (accusative)	talo-n	talo-t	「家を」
様格 (essive)	talo-na	talo-i-na	「家として」
変格 (translative)	talo-ksi	talo-i-ksi	「家になる)」
内格 (inessive)	talo-ssa	talo-i-ssa	「家の中で」
出格 (elative)	talo-sta	talo-i-sta	「家の中から」
入格 (illative)	talo-on	talo-i-hin	「家の中へ」
接格 (adessive)	talo-lla	talo-i-lla	「家(の表面)で」
奪格 (ablativ)	talo-lta	talo-i-lta	「家(の表面)から」
向格 (allative)	talo-lle	talo-i-lle	「家(の表面)へ」
欠格 (abessive)	talo-tta	talo-i-tta	「家なしで」
共格 (comitative)	talo-i-ne		「家とともに」
具格 (instructive)	talo-i-n		「家によって」

(Hakulinen 他(2004: 108) を基に筆者作成)

共格と具格は、単複共通の形態である。対格固有の形式は、人称代名詞と疑問代名詞 *kuka*「誰」にのみ現れる。それ以外の語の場合、単数形ならば属格と同形で、複数形ならば主格と同形である。対格と分格は主に直接目的語に付属する格である。対格が直接目的語として用いられるには、以下のような条件が必要である。

- ①肯定文における直接目的語であること
- ②行為（現象）が完結（完了）していること
- ③行為（現象）が、直接目的語の表す対象の全体に及ぶものであること

これら3つの条件に1つでも当てはまらない状況があれば、目的語には分格が用いられる。

0.4.2. 指示詞

指示詞は *tämä*「これ」、*se*「それ」、*tuo*「あれ」の3系列が存在し、後続する名詞がある場合はその名詞に応じて格変化する。

- 1) Ost-i-n tämä-n kirja-n.
 buy-IMP-1SG this-ACC book-ACC
 「私はこの本を買った。」

(作例¹⁾)

0.4.3. 動詞

動詞は人称（単数，複数の 1～3 人称の他に受動形という不定人称形がある），時制（現在，過去，現在完了，過去完了），法（直説法，条件法，可能法，命令法）によって語形変化する。4 つの時制が区別されるのは直説法のみで，他の法では現在と過去の区別がされるのみである。動詞は，語幹（過去標識）-（法標識）-人称接辞のように活用するが，直説法以外の法においては過去標識はつかず，動詞 olla 「ある，いる」を用いて分析的に表される。以下の表 2 と表 3 で，puhua 「話す」を例に，動詞の現在形と過去形の活用パターンをまとめる。直説法以外の法については現在形のみ示す。

表 2 動詞の活用（人称と時制）

	現在形	過去形
1 人称単数	puhu-n	puhu-i-n
2 人称単数	puhu-t	puhu-i-t
3 人称単数	puhu-u	puhu-i
1 人称複数	puhu-mme	puhu-i-mme
2 人称複数	puhu-tte	puhu-i-tte
3 人称複数	puhu-vat	puhu-i-vat
受動形	puhu-ta-an	puhu-tt-i-in

(松村 (1992: 677) を基に筆者作成)

¹ 例文のグロスと訳は全て筆者による。なお，全ての作例はコンサルタント（1.で示す人物と同一）のチェックを受けている。

表3 動詞の活用 (法)

	条件法	可能法	命令法
1 人称単数	puhu-isi-n	puhu-ne-n	φ
2 人称単数	puhu-isi-t	puhu-ne-t	puhu
3 人称単数	puhu-isi	puhu-ne-e	puhu-koon
1 人称複数	puhu-isi-mme	puhu-ne-mme	puhu-kaa-mme
2 人称複数	puhu-isi-tte	puhu-ne-tte	puhu-kaa
3 人称複数	puhu-isi-vat	puhu-ne-vat	puhu-koot
受動形	puhu-tta-isi-in	puhu-tta-ne-en	puhu-tta-koon

(松村 (1992: 677) を基に筆者作成)

フィンランド語には、否定を表す否定動詞という形式があり、人称活用を伴う。肯定文において主動詞に付属していた人称接辞は否定動詞につき、主動詞は人称接辞を欠いた形式になる。

- 2) E-n puhu japani-a.
 NEG.V-1SG speak:PR Japanese-PAR
 「私は日本語を話さない。」

(作例)

過去形や完了形が否定文に含まれる場合、主動詞は NUT 分詞 (過去分詞) の形になる。以下の3)は過去形の否定文である。

- 3) Olli ei käyttä-nyt tietokone-tta.
 Olli:NOM NEG.V.3SG use-NUTP computer-PAR
 「Olli はコンピュータを使わなかった。」

(作例)

なお、フィンランド語には10種の不定詞および6種の分詞が存在する。いわゆる辞書形はA不定詞基本形と呼ばれる。本稿における例文には、A不定詞基本形以外の不定詞は現れないため、他の不定詞や分詞の概要は割愛する。

1. コンサルタント情報

コンサルタントは以下の1名である。

氏名: Sinikka Kurosawa (シニッカ・黒澤)
 性別: 女性
 生年月日: 1964年8月21日
 出身地: フィンランド・ピュフター (Finland, Pyhtää)
 母語: フィンランド語ヘルシンキ方言
 備考: 日本に20年以上在住 (配偶者は日本人)

媒介言語は日本語である。例文を提示していただく際は、日本語文を示しながらその文が表す状況を説明して調査した。

2. 情報構造と名詞述語文相当の表現に関する調査結果

この節では調査の結果を示す。グロスに関しては Hakulinen 他(2004)の術語を参考にした。グロス中のフィンランド語の英語訳はインターネット上の辞書“EUdict” (<http://eudict.com/>) のフィンランド語・英語辞書を参照した。例文中の重要な要素には下線を引いた。

2.1. 焦点

2.1.1. 対比焦点 (主語)

(1) 「えっ, Tommi が来たの?」「いや, Tommi じゃなくて Tomi が来たんだ。」

Hei tul-i-ko Tommi?
 INJ come-IMP.3SG-QP Tommi:NOM

Ei, ei se ol-lut Tommi vaan Tomi.
 NEG.3SG NEG.3SG it:NOM be-NUTP Tommi:NOM but Tomi:NOM

主語が対比焦点となっている場合、「A でなく B」という構造は“ei A vaan B”と表現されるのが普通である。この時、「A でない」という否定形式は単独での否定形式と同じである。(1)において、2つ目の文頭にある ei は、Yes/No 疑問文に対する返答「いいえ」に当たる語であり、否定動詞の重複ではない。vaan は「A でなく B」という構造に用いられる接続詞で、肯定文にはほとんど用いられない。

2.1.2. WH 焦点 (主語)・WH 応答焦点 (主語)

(2) 「誰が来た (の)?」「Tomi が来たよ。」

Kuka tul-i?
 who:NOM come-IMP.3SG

Tomi.

Tomi:NOM

フィンランド語には、WH 焦点や WH 応答焦点を表す特別な形式は存在しない。イントネーションは下降調が原則であるため、上昇調にすることもほとんどない。強調したい語のアクセントをより強く発音することはありうる。回答の「Tomi が来たよ」の文は、動詞が省略されている。

2.1.3. Yes/No 疑問・形容詞述語応答焦点

(3) 「Tomi の方が大きいんじゃないの？」

「いや、Tomi じゃなくて、Jussi の方が大きいんだよ。」

Ei-kö	Tomi	ole	pide-mpi?
NEG.3SG-QP	Tomi:NOM	be:PR	long-COMP:NOM

Tomi	ei	ole	pide-mpi,	vaan	Jussi.
Tomi:NOM	NEG.3SG	be:PR	long-COMP:NOM	but	Jussi:NOM

形容詞述語の応答焦点の場合も、(1)と同様に「A でなく B」という構造に用いられる vaan が現れる。特殊な構文は見られない。

2.1.4. 文焦点（自動詞文）

(4) [電話で]「どうした(の)?」「うん、今、お客さんが来たんだ。」

Mitä tapahtu-i?
what:PAR happen-IMP.3SG

Joo, asiakas	tul-i	nyt. /	Joo, nyt tul-i	asiakas.
yes client:NOM	come-IMP.3SG	now	yes now come-IMP.3SG	client:NOM

文焦点の場合にも、特殊な構文はない。「今お客さんが来た」という文の語順は二通りある。前者は中立的な返答で、後者は「お客さんが来た」という事実を強調するニュアンスがある。後者の返答の方が文焦点に近い意味合いを持つと考えられる。

2.1.5. 対比焦点 (目的語)

- (5) 「あの子供が Tomi を叩いたんだって？」

「いや, Tomi じゃなくて, Tommi を叩いたんだよ。」

Lö-i-kö tuo lapsi Tomi-a?
hit-IMP.3SG-QP that:NOM child:NOM Tomi-PAR

Ei, hän ei lyö-nyt Tomi-a vaan Tommi-a.
NEG.3SG PRO.3SG.NOM NEG.3SG hit-NUTP Tomi-PAR but Tommi-PAR

目的語の対比焦点の場合も, *vaan* が用いられる.

- (6) 「赤い袋と青い袋があるけど, どっちを買う (の) ?」 「青い袋を買うよ。」

On punainen ja sininen pussi. Kumma-n osta-t?
be:PR.3SG red:NOM and blue:NOM bag:NOM which-ACC buy:PR-2SG

Osta-n sinisen.
buy:PR-1SG blue:ACC

対比される目的語が形容詞を伴う場合, 「青い袋」を二度繰り返すのではなく, 「青いを買う」のような文になり, 名詞「袋」は省略されることが多い. フィンランド語は修飾語も被修飾語にしたがって格変化するため, 被修飾語を省略しても, 残された修飾語によって被修飾語の文法役割を表すことができる.

2.1.6. 述語焦点

- (7) 「Tomi はどうした？」 「Tomi は朝からどっかへでかけたよ。」

Missä Tomi on?
what:INE Tomi:NOM be:PR.3SG

Hän läht-i aamu-lla jonnekin.
PRO.3SG.NOM leave-IMP.3SG morning-ADE something:ILL

日本語では「～はどうした？」のように述語を焦点にした疑問文が可能である. しかし, フィンランド語にはこのような表現はなく, 具体的に「どこにいるのか」という疑問文を用いる.

2.1.7. WH 焦点 (目的語)・WH 応答焦点 (目的語)

- (8) 「(あの子供は) 誰を叩いたの?」「(あの子供は) 自分の弟を叩いたんだ。」

Ketä tuo lapsi lö-i?
who:PAR that:NOM child:NOM hit-IMP.3SG

Hän lö-i oma-a velje-ä-än.
PRO.3SG.NOM hit-IMP.3SG own-PAR brother-PAR-POSS.3

フィンランド語は疑問詞も格変化する。目的語の場合は、分格 (あるいは対格) の形になる。通常の疑問文で疑問詞は文頭に置かれる。疑問詞が焦点の対象になる場合も語順には変化がない。

2.1.8. 文焦点 (他動詞文)

- (9) [電話で]「どうした (の)?」「うん, Tomi が (自分の) 弟を叩いたんだ。」

Mitä tapahtu-i?
what:PAR happen-IMP.3SG

No, Tomi lö-i velje-ä-än.
INJ Tomi:NOM hit-IMP.3SG brother-PAR-POSS.3

他動詞文の文焦点の場合、日本語の「ノダ」に当たるような特殊な表現はなく、「叩いた」という他動詞にも、焦点に関わる表現は存在しない。「どうした (の)?」という質問は、「何が起こったの?」という意味になる文で表す。

2.1.9. 目的語主題化

- (10) 「あのケーキ, どうした?」「ああ, (あれは) Tomi が食べちゃったよ。」

Missä kakku on?
what:INE cake:NOM be:PR.3SG

Voi, Tomi sö-i se-n.
INJ Tomi:NOM eat-IMP.3SG it-ACC

日本語では、その場にはない事物・人物を「あれ (あの)」という指示詞で表すことができる。しかし、フィンランド語で「あれ」に当たる指示詞を用いた場合、遠方に存在するものを指す意味でしか解釈できない。そのため、日本語で言う「あのケーキ, どうした?」というニュア

ンスを直接伝えられる表現は存在せず、「ケーキはどこにあるの？」という質問をする以外に方法は無いと思われる。フィンランド語には冠詞がないため、「ケーキはどこにあるの？」という質問中の「ケーキ」の定性も明示できない。回答における「あれ」は、質問文に既に出てきているケーキであるため、指示詞 *se* 「それ」を用いて表現できる。

2.1.10. 分裂文

(11) 「私が昨日お店から買って来たのはこのリンゴだ。」

- a. *Se on tämä omena, jonka ost-i-n*
 it:NOM be:PR.3SG this:NOM apple:NOM REL.ACC buy-IMP-1SG
kaupa-sta eilen.
 shop-ELA yesterday
- b. *Eilen ost-i-n tämä-n omena-n kaupa-sta.*
 yesterday buy-IMP-1SG this-ACC apple-ACC shop-ELA

いわゆる分裂文は、フィンランド語の場合は関係節で表すのが通常である。上記の(11a)が関係節を用いた文である。ただし、(11b)のように単に「昨日私はこのリンゴをお店から買った」という文でも表せる。(11b)の場合は、*tämän omenan* 「このリンゴを」という部分にプロミネンスが置かれる。

2.2. コピュラ文

2.2.1. 措定文 (主題)

(12) 「あの人は先生だ。この学校でもう3年働いている。」

<i>Tuo</i>	<i>ihminen</i>	<i>on</i>	<i>opettaja.</i>	<i>Hän</i>	<i>on</i>	
that:NOM	human:NOM	be:PR.3SG	teacher:NOM	PRO.3SG.NOM	be:PR.3SG	
<i>ol-lut</i>	<i>jo</i>	<i>3</i>	<i>vuo-tta</i>	<i>tä-ssä</i>	<i>koulu-ssa</i>	<i>tö-i-ssä.</i>
be-NUTP	already	3	year-PAR	this-INE	school-INE	job-PL-INE

「A は B だ」という措定文の場合、コピュラ動詞に相当する *olla* 「ある、いる」が用いられる。A が3人称単数の場合は“A on B”という構造になる。日本語の場合、2つ目の文には主語がないが、フィンランド語では最初の文を受けて人称代名詞 *hän* 「彼 (彼女)」を用いる。措定文でなくても、フィンランド語は3人称主語を省略できない。

2.2.2. 倒置指定文

(13) 「彼のお父さんは、あの人だ。」

Häne-n	isä-nsä	on	tu	mies.
PRO.3SG-GEN	father:NOM-POSS.3	be:PR.3SG	that:NOM	man:NOM

倒置指定文の場合も、(12)と同様にコピュラ文となる。倒置という概念が明確になるような構文はない。

2.2.3. 指定文

(14) 「あの人が彼のお父さんだ。」

Tuo	mies	on	häne-n	isä-nsä.
that:NOM	man:NOM	be:PR.3SG	PRO.3SG-GEN	father:NOM-POSS.3

倒置指定文(13)に対する指定文が(14)であるが、助詞「ハ」と「ガ」の使い分けのような違いは存在しない。主語・述語の格の違いもない。

2.2.4. 定義文

(15) 「あさってっていうのはね、あしたの次の日のことだよ。」

Ylihuominen	<u>tarkoitta-a</u>	huomisen	seuraava-a	päivä-ä.
the.day.after.tomorrow:NOM	mean:PR-3SG	tomorrow:GEN	next-PAR	day-PAR

定義を表す場合、(12)～(14)で用いた olla 「ある、いる」を用いたコピュラ文で表すこともありうるが、定義を示すニュアンスがかなり薄れてしまう。(15)のような場合は、意味の説明をする時に用いる動詞 *tarkoittaa* 「意味する」を用いることが多いようである。

2.2.5. ウナギ文

(16) [何人かで入った喫茶店で注文を聞かれて] 「私はコーヒーだ。」

- a. Ota-n kahvi-a / kahvi-n.
take:PR-1SG coffee-PAR / coffee-ACC
- b. Minu-lle kahvi. / kahvi-a.
PRO.1SG-ALL coffee:NOM / coffee-PAR

日本語で言うウナギ文は、フィンランド語には存在しない。(16a)のように「私はコーヒーを飲む」のような表現をするか、(16b)のように「私にはコーヒーを」のような文を用いる。動詞

がないという点では, (16b)がウナギ文にやや近いが, 名詞の格は主語に用いる格ではないので, 日本語とは文構造が異なる.

2.2.6. 逆行ウナギ文

(17) [注文した数人分のお茶が運ばれて来て「どなたがコーヒーですか?」との問いに]
「コーヒーは私だ。」

Minu-lle kahvi.
PRO.1SG-ALL coffee:NOM

日本語の場合, (16)と(17)では明らかに表現が異なっているが, フィンランド語には逆行ウナギ文のような表現はない.

2.2.7. 形容詞述語文

(18) 「その新しくて厚い本は (値段が) 高い。」

Se uusi ja paksu kirja on kallis.
it:NOM new:NOM and thick:NOM book:NOM be:PR.3SG expensive:NOM

「新しくて厚い」のように, 形容詞が連続する場合, 間に接続詞 ja「と」を挟むことが多い. 形容詞連結のための特別な形式は存在しない. ただし, 形容詞は被修飾名詞に伴って格変化するので, どの要素が名詞を修飾しているのかが明確になる. 以下に例をあげる.

(18') 「私はその新しくて厚い本を買った。」

Ost-i-n se-n uude-n ja paksu-n kirja-n.
buy-PST-1SG it-ACC new-ACC and thick-ACC book-ACC

3. 意外性・思い出し

(19) [砂糖の入れ物を開けて]「あっ, 砂糖が無くなっているよ!」

a. Oho, sokeri on loppu!
INJ sugar:NOM be:PR.3SG end:NOM

b. Oho, ei ole sokeri-a!
INJ NEG.3SG be:PR sugar-PAR

意外な事実を発見した場合に, 特別な表現は用いられない. 文字通りに「砂糖がない」という事実を直説法で述べるのみである. 意外性の表現は, イントネーションや文頭の間投詞に頼

るところが大きい。

(20) 「午後、誰かに会うはずだったなあ。誰だったっけ。あつ、そうだ！

Tomi だったな。」

Iltapäivä-llä	minu-n ²	<u>pit-i</u>	tava-ta	joku.
afternoon-ADE	PRO.1SG-GEN	must-IMP.3SG	meet-AINF	somebody:NOM
Kuka	se	<u>ol-i</u> ?	Oo, nyt	muista-n,
who:NOM	it:NOM	be-IMP.3SG	INJ now	remember:PR-1SG
se	<u>ol-i</u>	Tomi.		
it:NOM	be-IMP.3SG	Tomi:NOM		

日本語の場合、「～だった！」という、いわゆる思い出しの表現に過去形を使うことは多い。フィンランド語にも、同様の表現が見られる。(20)の状況は過去形を使うべき時制ではないが、「会うはずだった」という表現には動詞 *pitää* の過去形が、「誰だったっけ」、「Tomi だったな」という表現には動詞 *olla* 「ある、いる」の過去形が用いられている。これまでのデータにおいては、日本語とフィンランド語は共通点があまり見られなかったが、過去形によりモダリティを表すという現象は、両言語に見られる。

略号一覧

グロスに関しては基本的に Hakulinen 他(2004)の術語とその日本語訳に従う（日本語訳は筆者による）。日本語における（ ）内の表記はその他の文献等での呼称である。

	英語	フィンランド語	日本語
-			形態素境界
./:			形態素内の意味境界
1	1 st person	1. persoona	1 人称
2	2 nd person	2. persoona	2 人称
3	3 rd person	3. persoona	3 人称
ACC	accusative	akkusatiivi	対格
ADE	adessive	adessiivi	接格
AINF	A-infinitive	A-infinitiivi	A 不定詞（基本形）
ALL	allative	allatiivi 向格	

² (20)において1人称代名詞「私」が属格形になっているのは、義務を表す構文の特殊性による。フィンランド語学では義務構文とも呼ばれる。意味上の主語は属格形になり、直接目的語は主格形になる。

COMP	comparative	komparatiivi	比較級
ELA	elative	elatiivi	出格
GEN	genitive	genetiivi	属格
ILL	illative	illatiivi	入格
IMP	imperfect	imperfekti	過去 ³
INE	inessive	inessiivi	内格
INJ	interjection	interjektio	間投詞
NEG	negative	negatiivi	否定
NOM	nominative	nominatiivi	主格
NUTP	NUT-participle	NUT-partisiippi	NUT 分詞 (能動過去分詞)
PAR	partitive	partitiivi	分格
PL	plural	monikko	複数
POSS	possesive	possessiivi	所有接辞
PR	present	preesens	現在
PRO	pronoun	pronomini	代名詞
QP	question particle	kysymyspartikkeli	疑問小辞
REL	relative	relatiivi	関係詞
SG	singular	yksikkö	単数

参考文献

- Hakulinen, Auli, Maria Vilkuna, Riitta Korhonen, Vesa Koivisto, Tarja Riitta Heinonen, Irja Alho. 2004. *Iso suomen kielioppi*. Helsinki: Suomalaisen Kirjallisuuden Seura.
- 松村一登. 1992. 「フィンランド語」(亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典第3巻 世界言語編』: 673-688) 東京:三省堂.

参考資料

EUdict <http://eudict.com/>

³ フィンランド語学では、いわゆる過去形は imperfekti (未完了形) と呼ばれ、現在完了・過去完了を表す perfektii (完了形) と対立する位置づけになっている。厳密には日本語訳と合致しないが、本稿では便宜上 imperfekti を「過去」とした。

